

地域づくり交流会 in 釧路

「地域の魅力発掘と磨き上げ」開催内容

1. 日時：令和 7 年 1 月 28 日（火） 14：30～16：30
2. 場所：釧路市交流プラザさいわい 1 階多目的ホール(小)(釧路市幸町 9 丁目 1 番地)
3. 基調講演
講演タイトル：地域の多様な人材の活躍と資源の磨き上げについて
講師：一般社団法人十勝うらほろ楽舎 代表理事 山内 一成 氏

4. パネルディスカッション：地域の魅力発掘と磨き上げについて

役 割	所 属	役 職	氏名（敬称略）
パネリスト	一般社団法人なかしべつ観光協会	事務局次長	植木 啓美
パネリスト	株式会社 Knot（ノット）	代表取締役	植竹 大海
パネリスト	市民団体クスろ	代表	須藤 か志こ
パネリスト	一般社団法人十勝うらほろ楽舎	代表理事	山内 一成
ファシリテーター	公益財団法人はまなす財団	主査	大関 太一

5. 参加者：32名
関係者：12名
報道機関：1社

6. 交流会の要旨

（1）基調講演

地域の多様な人材の活躍と資源の磨き上げについて 一般社団法人十勝うらほろ楽舎 代表理事 山内 一成 氏



- 三重県四日市市で兼業農家の長男として生まれ、高校卒業まで三重で過ごしました。その後、東京で18年間働き、2016年に帯広へ移住、5年間活動した後、浦幌に移住しました。現在、私は3つの事業を経営しており、最初に立ち上げた「TASUKI 有限事業組合」は農業インターンシップをコーディネートする会社です。また、家族や仲間と「ミナイカシ合同会社」という農業法人を立ち上げています。十勝との出会いは、大学時代に参加した農業インターンシップでした。このインターンシップを通じて、今日のテーマ「地域資源の魅力発掘と磨き上げ」について、「出会いがあって、お互い触発され、切磋琢磨し合って共に育む」と

いうことを、私なりに学びました。

- 農業インターンシップでは、全国から集まった大学生が十勝の農家で作業をしながら、日々の振り返りや将来について話し合います。昼間は収穫作業を行い、夜は農家の役に立つためにどうすれば良いかを議論します。昼は芋掘り、夜は自分掘りのような形です。その過程で、農業の大変さや農家の温かさに触れ、成長していくことができます。農家にとっても、学生の素朴な質問を通じて自らの農業への思いを再確認する機会となり、こうした相互作用が、若者と農家の双方にとって刺激となり、共に成長する場を生み出しています。
- 「TASUKI 有限事業組合」は、この経験をもとに設立しました。私の中で「タスキをつなぐ」というテーマを軸に、都市と農村にタスキをかけ、次世代につないでいくことを目指しています。若い頃、年配の農家さんや地域の方々に色々なことを教わった経験から、これが使命だと考えています。現在、私が人生をかける場所だと思っているのが浦幌町です。かつて炭鉱の町として栄えましたが、現在の人口は約 4,200 人、毎年 100 人ペースで減少しています。ただ、転機があり、2010 年に町唯一の高校の廃校を契機に、地域の大人たちが「うらほろスタイル」という取組を始めました。これは、町内の小中学生に町の大人たちの仕事や取組に関わるきっかけを、学校と地域と行政が枠を越え、いろんな方々と手を取り合って作っていかうとするものです。
- この取組を 18 年間続けた結果、町のことを知り、町に対する愛着を持つ若者が増え、子どもたちのアイデアから、ビジネスが生まれました。町の花「ハマナス」を活用したオーガニックコスメ「rosa rugosa」は、地域おこし協力隊が町の皆さんの支援を受けて事業化しました。浦幌町は人口全体の減少が続く一方で、20 代の転入者が 3 年連続で増加しています。また、大企業や官公庁を辞めて移住する人々や、元 J リーガーなどのアスリートも町に関わるようになりました。さらに、行政も 2 年前に当時 48 歳の町長になり、議会も若手や女性議員の割合が高くなり、全国でも例を見ないと注目されています。
- 一般社団法人十勝うらほろ楽舎は、町内の課題を解決するために、町外の大学生や企業人、専門家をつなぎ、ハブとなる中間支援団体として地域の可能性を引き出しながら事業化を進めています。自主事業の他、町からの委託事業や国の公費事業を組み合わせで運営し、若者の受け入れ・育成や、地域課題の分析・解決を行っています。
- 具体的には、今後、大企業の幹部になる方々向けに「うらほろアカデメイア」という研修を実施。この研修は、自分の仕事観、価値観を問い直すプログラムで、第一次産業の方からの話を聞くことで、肌感覚で持続可能な企業経営を学ぶ機会を提供しています。また、磨き合いという観点から、地域の農家さんや民間企業、行政の方々と対峙し、問い直しをします。結果的に研修受講者だけではなく、地域の方々も磨かれていきます。
- もう一つ、伝えたい取組が、「うらほろマラソン」です。2022 年に始まり、3 回開催してきました。東京オリンピック出場の大迫選手との交流をきっかけに、J リーガーやトップアスリートとも連携しながら取り組んでいます。大事にしたいのは地域づくりで、行政、農家、住民と一緒に作り上げるマラソン大会をコンセプトにしています。一番の目玉「キッズチャレンジ」では、大会の 1 カ月前から町の子どもたちが毎日ランニングを行い、住民が伴走して支援します。地域の大

人が子どもたちを支え、普段接点のない住民同士の関わる機会が生まれ、子どもたちの成長を町ぐるみで応援する環境が醸成されています。ゴール地点では町内外の飲食店がブースを出し、交流の場としても機能しています。この取組が町の魅力を高め、移住や雇用、企業との連携につながったり、そんな循環になっています。

- 十勝うらほろ樂舎は、地域の課題を捉え、仮説を立てて解決策を考え、専門家やパートナーを招いて試験、実証を行い、事業化を進めるというプロセスを重視しています。また、若い世代の育成にも注力し、地域の担い手を発掘・支援することで、持続可能な地域づくりを目指しています。これからの地域づくりには、行政と民間が協力し、柔軟に取り組む姿勢が求められます。「ヒト・モノ・カネ・信頼関係」といった経営資本を育み輩出する役割を果たしていきたいです。



(2) パネルディスカッション

活動紹介 一般社団法人なかしべつ観光協会 事務局次長 植木 啓美 氏



- 私は３年前に千葉県から道東の雄大な自然に惹かれて中標津町へ移住しました。なかしべつ観光協会では、観光スポットの開陽台でのイベント、ライダー向けのイベントやモアン山ハイキングツアーなど中標津町の魅力を伝え、たくさんの方に来ていただこうと活動しています。
- はまなす財団の支援を受け、地元で愛される老舗の味を「中標津思い出キッチン」としてレトルト商品化ができましたので、その経緯についてお話しします。なかしべつ観光協会の観光資源活性化委員会で、中標津町のお土産品開発について議論し、常温で賞味期限が長く取り扱いやすく中標津らしい商品の検討をしました。地元の飲食店と協力し、缶詰・レトルト商品の試作を進めたところ、レトルトパウチの方がコストや使い勝手の面で優れていると判断し、町内の飲食店で人気のメニューをレトルトパウチ化することを決定。レトルト加工事業者と試作を繰り返し、地元での試食販売やアンケート調査を行い、高評価を得ることができました。

た。

- 商品開発について、はまなす財団の「地域づくり活動発掘・支援事業」での伴走支援を受け、改めてコンセプトづくりやターゲットの確認をしました。うまい、安い、早いというキャッチコピーの有名企業がありますが、本商品は、店舗でシェフが作ったものを商品化しているため安くはなく、大量製造は出来ないのも早くありません。旨いですが、高級店のような美味しさではなく、地域の方々に愛され続けてきた味ですので、あえて、「安くない、早くない、まあまあうまい」をコンセプトに、中標津町にゆかりのある方、中標津町に観光で来た方をターゲットにしています。
- リスク回避については、はまなす財団から紹介された食品衛生の専門家のアドバイスをもとに、製造工程や衛生管理の整備、契約書の作成、保険加入などの対応を進めました。パッケージは、町内のデザイナーと協力して作成し、レトロ調のデザインが好評を得ています。現在、空港や町内の小売店で販売され、オンラインショップやふるさと納税の返礼品としても展開しています。
- メディアにも取り上げられ、北海道エアシステムの機内販売にも採用されるなど、順調なスタートを切ることができました。今後は、「中標津想い出キッチン」が町の定番土産として広く認知され、定着するよう継続的なPRや新商品の開発に取り組んでいきます。

活動紹介 株式会社 Knot 代表取締役 植竹 大海 氏



- 会社は2021年4月に設立、2022年8月から鶴居村でビール製造を開始し、ビール製造だけでなく、醸造所の設計や立ち上げ支援、技術指導などのコンサルティング事業も手掛けております。埼玉県出身で2007年からビール業界に携わり、2018年に上富良野町へ移住し、海外での醸造経験を経て、鶴居村でビール事業をスタートしました。
- 企業テーマは「ビールと、つなぐ。ビールで、つなぐ。」です。会社名のKnotもつなぐという意味があります。クラフトビールを単なるブームではなく、文化にしていきたいと考えております。
- 1つ目のつなぎは、「地域とのつなぎ」です。2003年に廃校となった旧茂雪裡小学校の体育館を醸造所として改修し、観光施設としても機能しています。また、地域の方々が気軽に集まれる場となっており、ビールの量り売り文化も生まれつつあります。自分で設計を手がけた醸造設備は、ショールームのように開放し、ビール工場を作りたい方の参考になればと思っています。
- なぜ鶴居村でビール作りを始めたのかよく聞かれますが、まずは「ご縁」です。損得ではなく、道東地域にクラフトビール醸造所がほとんどないことをビジネスチャンスと捉え、新たな文化を創るためにこの地を選びました。村の基幹産業は酪農ですが、ビール製造の副産物である麦のカスは全て牛の飼料になっています。私やスタッフ全員が移住者で、釣りやアウトドアを楽しめる環境が魅力的だったこと、そして地域の人々が応援してくださったことが何よりの理由です。

- 2つ目のつなぎは、「カルチャーとつなぐ」です。ビールが主役ではなく、他の引き立て役になることを目指しています。中標津のレトルトカレーと一緒に楽しんだり、浦幌観光で味わったり、特別でない日もクラフトビールを飲みながらの食事でちょっとした贅沢を提供できればと考えています。
- 3つ目のつなぎは、「ひととつなぐ」です。日本のビール業界では醸造家が不足しているため、独立を目指す研修生を受け入れ、技術指導を行うことで業界全体の発展にも貢献したいと考えています。
- ビールをコミュニケーションのツールとして使っていただきたいと思います。地域の方に愛着を持ってもらえる商品に成長していけたらと考えています。

活動紹介 市民団体クスろ 代表 須藤 か志こ 氏



- 私は釧路市に住んでおり、一般社団法人ドット道東と市民団体クスろに所属しています。ドット道東は、北海道の道東4地域（十勝、釧路、根室、オホーツク振興局エリア）を拠点に、ガイドブックの発刊などを通じて地域の魅力を発信してきました。
- クスろは2014年に設立された市民団体で、釧路に住む人や釧路にゆかりがある方が中心となり活動しています。「くしろにもっとユーモアを」をコンセプトに、お土産キーホルダーやLINEスタンプの制作などを行い、地域の魅力をユニークな形で発信しています。子どもの頃は釧路の衰退したイメージに寂しさを感じていました。
- その後、クスろの仲間たちとドット道東に加入しました。メンバーは基本的に道東出身で、ほとんどのメンバーが、地域を好きだけじゃない気持ちを持っていました。道東で生きていくにあたり、1つ新しいものを作りたいという想いで、地域の人々の思いや夢をまとめたガイドブックとビジョンブックを制作しました。ガイドブックでは、観光雑誌では取り上げないような、地元の私達が普段行く所や標茶高校などを紹介し、作る過程で私達も地域の魅力に気づきました。これが好評で、地元の人々から「初めて自分の地元がいい場所だと思った」「道東に帰りたいと思った」との声を多く受けました。その後、1,013人の道東に関わる、ゆかりある人々に夢を語ってもらう「ビジョンブック」を発売しました。
- 今振り返ると10代の時は、「働きたい会社がない、遊べる場所が少ない、友達が全然いない」など、文句ばかりでしたが、この活動を通して、「自分たちの地域に必要なものを自ら作り出すことができる」、「遊びたい場所も知らなかっただけ」、「十勝やオホーツクも車を出せば友達に会いに行ける」、という意識が育まれました。地域の魅力を発掘し、磨き上げることで、自分の地元を肯定する力が育まれたと思っています。
- 現在、ドット道東は「DOTO-NET」という新事業を展開しています。このサービスは、道東にゆかりのある20代の若者と企業・自治体をつなぐコミュニティで、若者の挑戦を支援する仕組みを作っています。大学生が、農業の楽しさや第一次

産業の素晴らしさを伝えたいという理想を叶えるため、皆でアスパラを収穫して、調理して食べるイベントを企画したり、道東にゆかりある 20 代を東京で集めて、道東に関する理想を語り、身近に先輩をつくるイベントをしています。地元を肯定する力を身につけてもらった先に、つなげる受け皿を作っていくことが非常に重要で、ドット道東でもクスろでも、受け皿の部分を担当していきたいです。

地域の魅力の見える化と発信について

(山内氏) 主軸は地域に根差して継続して活動している方々、ということを見失わないようにしたいと思っています。私たちが果たしている中間支援としての役割は、元々地域にあるものを見えるようにして、伝わるようにするというところなので、主客が変わらないように意識しています。外から見ると、魅力が出てきたり、気づいたりするのですが、実際の活動や、何かを生み出そうとする時に、その主軸になる地域でずっと続けている方のペースや心持ちを大事にすることを疎かにして、外側の企業が強引に進めると、スピード感やペースも違うため、続かないと思います。

(植木氏) 観光協会は地域の魅力を効果的に PR するために、地元メディアとの友好関係を築き、観光協会の取組を発信していただいています。また、地域の魅力を町外や道外の人々に伝えるだけでなく、地元の人々にも知ってもらい応援してもらうことが重要と考えています。そして、近隣の観光協会と連携し、地域全体で魅力を発信する活動を進めていきたいと考え、活動しています。

(植竹氏) 私たちは民間企業なので、市町村の枠にとらわれないよう意識し、道東地域単位で活動しています。十勝に良い素材があればそれを活用し、紋別で商談の依頼があれば伺います。道東を主軸に活動することを意識し、地域全体の魅力を発信できればと考えています。

(須藤氏) 応援してもらうことが大変重要だと思っています。また、当事者意識をどう持ってもらうかを意識しています。ガイドブックやビジョンブックの作成には、編集部の 5、6 人のメンバーだけでなく、校正やアンケート集計などで 100 人から 150 人くらいの人々が関わっていて、「自分が作った」という意識が生まれ、地元の人々に愛される本になったと感じています。作る過程で人々をどう巻き込むかを常に考え、一緒に作りましょうと声をかけるようにしています。

お互いの活動で気になることや、もっと深く聞いてみたいこと

(須藤氏) 植木さんにお聞きしたいのですが、中標津思い出キッチンの取組について、地域の方からの反応をお伺いしたいです。印象に残った地域の方からの反応があれば教えてください。

(植木氏) 地元の方は直接お店で食べることが多く、自分用に購入することはないと思いますので、お土産として購入されることを期待しています。最近の事例として、中標津町に本店があるお店の方が札幌支店にお土産として持っていったところ、札幌支店で商品を取り扱いたいという連絡を受けました。このように、中標津町の魅力をゆかりのある方に伝え、広がっていくことに繋がったのは嬉しく感じます。

(植竹氏) 山内さんのうらほろアカデミアの活動が非常に興味深いです。数日間の濃縮した研修を経て参加された方からのフィードバックがあればお聞きしたいです。

(山内氏) 去年 4 回の研修を実施し、先週、参加者と同窓会的な集まりを東京で行い、フィードバックを受けました。私たちがこだわっているのは、研修がその場限りにならないよう、自分や自社に問いを向けることです。研修後には「会社に対してこういう働きかけをしました」という報告をよく耳にします。特に嬉しいことは、個人だけでなく会社全体で変化する動きが出てきている点です。研修に参加した飲食店の DX 等支援の会社では、会社全体で十勝や北海道の環境再生型農業プロジェクトに人や資金を提供する動きが出てきました。プロジェクトに資金の支援だけでなく、一緒に進める当事者としての関係性が醸成されつつあることを感じています。

(植木氏) 山内さんにお尋ねしたいのですが、学生たちは、他にもさまざまな選択肢がある中で、なぜ山内さんの農業インターンシップに来るのか、きっかけや目的などを知りたいです。

(山内氏) 年間 100 人以上の学生が来ます。約 2 割が農学部 of 学生です。就農を考えている人は少ないですが、農業関連職や食に関心を持つ人が 2、3 割います。参加者の友達、先輩からの口コミがほとんどです。インターンシップは「自分発掘」をテーマに、農業との出会いを通じて自己分析や自己発見の機会を提供しています。参加した学生は SNS で口コミを投稿するので、多種多様な学生が集まっています。また、都市部ではなく地域や地域から何かを生み出す可能性に関心を持つ若者が集まってきています。

(山内氏) 須藤さんの所属しているドット道東さんと改めて連携したいです。お互いの強みやターゲットも若干違うのがいいと思っています。また、植竹さんがクラフトビールをブームから文化に繋げるためにどのように仲間や協力者を作っているのか、お聞きしたいです。自分も「タスキをつなぐ」ということを信念としているため、すごく重なる部分があります。文化にしていくには、一人では難しく、仲間や協力者の存在が非常に重要だと思います。

(須藤氏) 私たちもインターンシップ事業をしており、山内さんが実施している「北海道十勝うろほろアグリダイブプログラム」は毎回参加人数が多くて、ぜひ勉強させていただきたいと思っています。

(植竹氏) ビールの醸造技術を伝えることで仲間を増やすのは重要な活動の一つですが、研修を受けた方々には道東地域で創業してほしいと考えています。ビールだけでなく、日本酒やワインなど、お酒をツーリズムのテーマにできると考え、近所に仲間が増えればできることも増えて、より文化に近づけるのではないかと考えています。

10 年後を見据えた持続可能な発展へのビジョンについて

(植竹氏) 道東や北海道に限らず、地方都市の人口減少は大きな問題で、私はこれを逆に捉え 10 年後には東京でも人口が減少することが明確で、道東地域や北海道は東京の 10 年先を行っていると考えています。今色々なことに失敗をしてもいいのでチャレンジする、10 年先に試せている環境にあるとポジティブに捉えています。また、持続可能性を重視し、商売を広げすぎないことも意識しています。私たちのビールが大人気になっても、工場を拡大するのではなく、販売地域を限定することで商品のブランド価値を高めていき、事業をコンパクトにしていくことを心がけています。

(植木氏) 観光協会としては、まずは中標津町を知ってもらい、足を運んでいただくことが大前提ですので、情報発信は今後も重要な課題の一つです。多くの方に道東地域

に足を運んでもらい、雄大な自然やアクティビティを楽しんでいただき、その実体験を通じて環境や自然、地方経済、第一次産業の課題を実感してもらう取組を考えています。また、一度だけでなく、地域の人々との交流を通じて何度も訪れたい、友達に紹介したい、この地域を守りたい、応援したいという、関係人口を増やす取組を進めていきたいです。

(須藤氏) 道東は現在 90 万人強の人口がいますが、2045 年には 3 分 1 の人口が減ると予測されています。人口減少は止められないので、人口が 3 分の 2 になっても、経済活動や環境も 3 分の 2 にしないためには、一人当たりの頑張りを増やすことだと思っています。それは例えば、植竹さんのお話にあった新しい醸造家を生み出すことや、山内さんのお話にあった農業インターンシップを通じて道東地域に興味を持つ学生を増やすなどです。また、技術や考え方、リソースをオープンにして次世代に渡していくことが重要です。私たちドット道東だけでなく、企業や自治体とも協力し、進めていきたいと考えています。

(山内氏) 十勝においては人口が増える可能性があると感じています。現在 34 万人程度ですが、移住してきたとき、十勝には 100 万人が住むポテンシャルがあると感じました。東京や実家の三重に帰ると、夏はもう住めないなと思いますし、実際、移住や二拠点居住を検討する人の声を多く聞きます。ただ、人口が増えれば良い訳ではなく、経済、社会、環境が調和した姿が実現できればと考えています。人間、頑張りすぎるのではなく、頑張り方を変えた方が良いと思っています。農業で言えば、農家さんが悪いわけではなく構造問題ですが、大量生産・大量消費の流れで化学肥料を多用し、土地を痩せさせてきた現状を見直し、環境再生型農業で土を再生させることに尽力したいと思います。

このような取組は一人や一団体だけでは達成できないため、協力が重要です。異なる分野の人々が手を取って共に未来を進むことが大事で、面白いコラボレーションをワクワクしながら進めて行ければ。そういう後ろ姿を子供たちに見せ、働くことや生きることが楽しそうだと感じてもらえるような未来を目指しています。

